

教育課程部会の書面審査について

天笠 茂

石井先生の提案について

・授業を受けることが、学ぶことが制度的にどのように考えられ担保されてきたか、歴史の流れを丁寧に記述していただいた。これからの授業と学校のあり方をはじめ、この種の議論を進めていくにあたって、共通に得ておくべき知識や課題、それに基本的な考え方を提示していただいた。

・とりわけ、テクノロジーの活用を考える上での原理・原則として、「個別最適化」への矮小化に陥らないためにとの箇所は、とりわけ重要な指摘ととらえたい。この指摘については、今後さらに部会において議論を深めていきたい。

熊本市教育委員会の提案について

・“予備時数”をどのように考えるかが問われた提案と受け止めた。それは、教育目標の達成にあたり、学習者の学びに遅滞が生じたり、あるいは、不足の事態の発生によって授業の時間の確保が阻害されたりすることを想定した、もしもの備えの時間ととらえたい。まさに、不測の発生に備える安全装置のようなものであり、学校それぞれが判断して備えておくものである。したがって、それぞれの学校の判断が重視されるべきものと考えたい。

その意味で、その時間を削減しても市の学力調査の結果について、“負の影響は見られない”というのは当然のことと思われる。ただ、小学校の場合、予備時数の削減によって、むしろ“学年、教科に伸びがみられた”との記述もあり、これはどのように解釈したらよいのか。予備時数を設けていたことが、むしろ授業の効果的な運用を阻害するなど、学校の円滑な教育活動にマイナスの影響を及ぼしていたともとらえられ、説明をお願いしたいところである。

・一方、ICTを活用することと授業時数の増加・削減をはかることについては慎重に検討したい。ICTの活用によって、学習の個別化・個性化など学習過程の多様化が図られことは、これまで取り組まれてきた実践例からも理解できる。しかし、そのことは、1単位時間の弾力的運用にあたりICT活用が効果的であることを指摘できても、授業時数自体の増加、あるいは、削減について云々するには検討を必要とする。少なくとも、カリキュラムや学校経営の視点からの検討が欠かせない考える。

そのうえで、“授業時数の大枠の維持を前提に、各教科等への時数配分を弾力化”という提案について、これを弾力的なカリキュラム・マネジメントについての開発的な取り組みの求めとして受け止め、今後さらに部会において議論を深めていきたい。